

7. 昭和初期の横浜の文化住宅の調査とミニ博物館づくり

保土ヶ谷宿400俱楽部
(神奈川県横浜市)

I. 活動の背景と目的

横浜には坂を上り丘の上の住宅地の中に洋館付の住宅がある。数年前のことであるが、保土ヶ谷の丘にも何軒があることに気がついた。実際に注意して歩いてまわると、二十数棟もあった。普通の住宅地だとと思っていたので、こんなに多くあるとは思わなかった。色々調べたり聞いてみると昔はもっと沢山あったということが分かってきた。

港を囲んでいる丘は、保土ヶ谷だけでなく鶴見、神奈川、西、中、磯子にもある。これらの丘は、昭和初期の横浜市の市域と一致している。そこで今回は東海道沿いの市民グループが以前から交流があり、連携が取りやすかったことと、人手の関係で、旧東海道の北側の鶴見、神奈川、保土ヶ谷の三地区に限定してまわることにした。

中区の西洋館はよく知られて調査も進んでいるが、横浜の郊外住宅の文化住宅の調査は横浜建築事務所協会の2年前のレポートがある程度である。新宿、世田谷、大田区などでは調査がされているが、今回の調査が横浜市内では本格的なものだと思える。

「となりのトトロ」の舞台となった、懐かしい感じが漂う家が「洋館付きモダン住宅」(文化住宅)である。和風住宅の玄関の脇に洋館がついている。懐かしい感じもあり洒落た雰囲気もあるのが文化住宅である。洋館は中区の山手にあることは知られている。ただし、洋館がある和風住宅は横浜の鶴見、神奈川、保土ヶ谷、磯子などに多く分布している。

そこで今回、近代建築の個人住宅—洋館付きモダン住宅(文化住宅)—に関して、横浜市内の東海道沿いの分布(鶴見区、神奈川区、保土ヶ谷区)の調査をまとめ、長く住み続ける工夫や保存に向けての市民による非営利の支援ネットワークづくりについても考えることとした。

明治維新以降の富国強兵のもとの欧米の列強に追いつくために工業の発展に力を入れてきたが、昭和にはいるとデパート、ラジオ、トーキーなどの大衆娯楽・消費も盛んになり、繁華街でもモボ・モガのファッションが流行した。

西洋の技術で建てられた西洋館は横浜、神戸、函館などの開港場から全国に広がって行く。大正から昭和にかけて拡大したサラリーマン層を中心に和洋折衷のライフスタイルが普及し、一般的の個人住宅にも西洋館の影響を受けた建物が建てられる。現代の個人住宅の原型となる「洋館付きモダン住宅」(文化住宅)の登場である。

日本人の平均寿命は80年代になっているが、日本の個人住宅の平均寿命は26才と



洋館付きモダン住宅(文化住宅)

いわれている。省資源、リサイクル時代において、また、幼児から住み慣れた思い出の家は人間の平均寿命並みに長く生かして使っていくことが望まれる。

地球環境を保全していくことが意識され始めているが、廃棄物の減少や森林資源の節約という課題を実現していくために、長く住み続けていく知恵が大切になっている。また、古い家の廃材の再利用の市民グループのネットワークが広がりつつある。

今まで残されている洋館付きモダン住宅（文化住宅）の寿命は60年を越えている。急速になりつつあるとはいえ、長く使いこなすという実例として文化住宅を取り上げた。町の表情を豊かにするのは現代の建物だけでなく、近世や近代の建物が残っていると、町の表情をより豊かにしてくれるのである。今回のレポートでは「洋館付きモダン住宅」としているが、歴史関係では「文化住宅」と呼び、建築関係では「中廊下型住宅」ないし「和洋折衷住宅」としている。広辞苑を見ると関西では文化住宅は長屋を指しているといつてはいるが、芦屋市美術館によると、関西では洋館付きモダン住宅の呼び方は、単に洋館といつてはいるとのこと。

大正時代は、後発資本主義国として富国強兵の「明治時代」と慢性的不況と長期にわたる戦争の時代の「昭和」のはざまで文化（大正デモクラシーの影響で「文化」は単なる教養ではなく、軍国主義・官僚主義への批判のキーワードでもあった）という言葉が、哲学文学から日常生活にいたるまで、文化コンロ、文化包丁などのように用いられた。この文化住宅が代表的な使い方で、関東大震災以降横浜や東京、大阪、函館、福岡など都市化が進む地域で郊外住宅として全国的に建てられた。

都市の人口集中に対応した宅地需要の増大のための都市周辺に開発されたのが郊外住宅地で、ここに建てられたのが洋館付きモダン住宅である。住宅博覧会や住宅改善運動により全国的に流行した。開発の主体としては、電鉄会社、土地区画整理組合、信託銀行、土地会社、地主などであった。

当時は西洋かぶれのいんちき住宅との批判もあったが、都市生活者—サラリーマンにとっては憧れの住宅でもあったといわれる。谷崎潤一郎の「痴人の愛」では文化住宅を舞台にした状況が描かれている。

近代都市形成史からみると、関東大震災は市街地から旧江戸の町並みを消し去り、欧米モダニズムの影響の強いモダンな帝都東京・港都横浜の盛り場とサラリーマン文化を生みだした。同時に重工業の発展に伴い、帝都への人口増の受け皿となる郊外の開発（耕地整理事業、民間乱開発）が広がり、文化住宅などが建てられる。昭和初期の文化住宅の土地家屋の価格は標準で2000から3000円程度（住宅金融史p69）であったため、購買層はおのずと中流の上クラスに限定された。

II. 活動の内容—調査の進め方・まとめの概要—

まちを見ながら歩く「まちウォッチング」（路上観察）は、建築の知識がそれほど無くとも、だれでも楽しめるからおもしろい。居住者の方に迷惑をかけないようにして、ゆっくり歩いて犬や子どもを連れたりして、道路側から眺めることで、通りや建物や植木や花を見て楽しむことができる。まちを歩いて楽しむ見どころは、次の通りである。

- ①建物—屋根の色・形、窓のデザイン、外壁の色・仕上げ
- ②庭—植木、花
- ③門—色・形
- ④塀—色・形

⑤道一帯、行き止まり、犬走り

⑥坂一勾配、展望

⑦眺めのいい所

⑧公園

⑨商店街の個性的な店

洋館付きモダン住宅（文化住宅）についても、以上のような項目を見ていくことになる。戦前の庭の木には背の高い木（シュロ、スダシイなど）が多い、手入れがいい、という共通した感じがする。また、建物については、屋根の勾配がきつい切妻のフランス瓦（オレンジ、青、緑）、窓の木枠のデザインが様々、窓の出窓の感じも洒落ている。外壁が板見下張りやモルタルで、ベージュ色や土色が多い。

文化住宅の分布は中区、西区、鶴見区、神奈川区、保土ヶ谷区、磯子区については丘の上に数多く分布している。その他の地域にもあるが数は少ない。戦前、宅地開発が行われた地域に流行し多く建てられてきている。

そこで、今回の調査エリアは旧東海道沿いの北側の鶴見区、神奈川区、保土ヶ谷区に限定して、大正11年や昭和6年の地図に民家が存在し、戦災にあってないエリアに着目し、調査対象地区とした。

鶴見区では寺谷一、二丁目、諏訪坂、東寺尾北台、東寺尾中台、東寺尾東台、岸谷三、四丁目で最寄り駅はJR鶴見駅、神奈川区では、白楽、白幡町、白幡上町、白幡西町、白幡仲町、白幡南町、白幡向町六角橋六丁目、篠原西町（港北区一旧神奈川区）、篠原台町（港北区一旧神奈川）で最寄りの駅は東横線白楽駅、保土ヶ谷区では、月見台、霞台、桜ヶ丘一、二丁目で、最寄り駅はJR保土ヶ谷駅である。

まず、「まちウォッチング」を重ねて分布状況を把握し一覧表を作成した。鶴見区の調査対象地区には27軒、神奈川区は26軒、保土ヶ谷区では19軒が確認された。それぞれの居住者に調査の協力を求めるため直接訪問してお願いした。留守の場合にはアンケートをポストに入れた。この結果、アンケートのみの協力は12軒、訪問調査協力は19軒となった。

現代の個人住宅の建物は横浜、東京、名古屋、神戸などの都会では、どこでも同じ感じがする。その点、同じ文化住宅といっても、鶴見、神奈川、保土ヶ谷それぞれ作り方が異なり、個性的なところが楽しいのである。

31の事例の建築された年は震災後・昭和初期が22軒あり、大正（震災前）は2軒であった。また、建築時に住まい始めたものは、19軒となっていた。文化住宅の価値については17軒が認識していた。訪問調査協力の19軒は、当初の予想を越える数で、建物に愛着や誇りを持って住まい続けていることが確認できた。今回調査対象としなかったが、これらのエリアには和風住宅も多く点在している。

当初建てた時は父親か、祖父が建てたケースで、お話を伺うことのできた方は、子供（年齢は70から80才前後）か孫になっている。和風住宅に洋館をしつらえた理由としては、舶来への憧れがあったようである。



フランス瓦の屋根

聞き取り・実測調査の範囲での住宅プランの特徴は、中廊下型が14軒を占めていた。和風住宅の玄関の脇に洋館付きモダン住宅がついているのが、文化住宅の特徴点である。その位置は玄関の左側が10軒、右側が6軒、その他が3軒であった。玄関の東側に洋館があるもののうち、左側に玄関があるものが5軒あった。増改築・利用の変遷は、2階の増築、増築部分を下宿として貸す、離れを増築して二世帯居住、一軒丸ごと寮など、様々な利用状況がある。

現在困っていることは、長く住んでいるので修繕に手間が掛かること、庭が広いので手入れが大変なこと、ガラス窓など部品がないので全面的に変えることが多いことなどである。洋館付きモダン住宅の屋根のフランス瓦は作った当時からそのまま現在も使用されているケースが多い。

以上の内容を3月に発表し、現地見学会も4回開催した。加えてビデオや小冊子を作成した。

III. 活動の効果及び今後の課題ー市民の保存ネットワークづくりー

開発と保存の関係では開発が優先されてきている。縄文・弥生から近世・近代などの文化財などは記録されるが、ほとんど保存されてきていない。該当地域の住民にも忘れ去られてきている。現代の建物だけで都市の表情を豊かにすることはできるのだろうか。近世や近代の建物がここかしこに存在していることが都市の表情を豊かにする。

また、有限な地球環境の保全を図り汚染を未然に防ぎ、多様な生物が共存できる環境づくりが人類の生存にも不可欠であることが、ようやく認識され始めている。廃棄物を減らし、森林資源の節約のために、住居を長く住み続けていくというライフスタイルが注目されてきている。

今回の近代の建物、洋館付きモダン住宅（文化住宅）は60年以上住まわれてきている。このため代替わりで新築されて急速になくなりつつある。また、補修の費用が掛かるので、建て替えという事態が当然発生する。そこで、できるだけ長く住み続けていく補修の非営利の支援方法や、何らかの具体的な保存への方向を市民が主体となって専門家とも協力しつつ非営利（NPO法人格の取得）で保存調査事業を進めていく知恵が要請されている。

町の宝物の設定は、行政や専門家だけにまかせるのではなく、地域の市民が大切だと思われるものを市民自身が積極的に認定していく筋道を作ることも想定できる。町の表情を豊かにしてくれる宝物が文化住宅であるとの共感の輪の広がりがあれば、文化住宅が市民認定の文化財とすることも考えられる。

次のような課題が今回の調査で確認できた。

①町の表情を豊かにする近代の建物

大正から昭和にかけて成長したサラリーマン層（都市生活者）を中心に和洋折衷のライフスタイルが普及し、一般の個人住宅にも西洋館の影響を受けた建物が建てられる。現代の個人住宅の原形となる「洋館付き住宅」（文化住宅）が登場する。文化住宅の特徴は、玄関の脇にある洋館の屋根がフ



洒落たデザインの窓の木枠

ランス瓦葺き急勾配の切妻、外壁は西洋下見板張りかモルタル、結晶ガラスの窓とドア式の玄関などで、洋風の斬新な外見であった。町の表情を豊かにするのは現代の建物だけではなく、近世や近代の建物が残されていると、町の表情をより豊かにしてくれる。

②長く使いこなすという実例

日本人の平均寿命は80年代になっているが、現代日本の個人住宅の平均寿命は30年前後といわれている。省資源・リサイクルの時代において、廃棄物の減少や森林資源の節約という課題を実現していくために、長く住み続けていく知恵が大切である。現代の文化住宅の年齢は60年を越えている。徐々になくなりつつあるとはいえ、長く使いこなすという実例として文化住宅を取り上げた。

③封建的生活様式を変えた都市生活者の住む家

明治の中頃から衛生上問題がある土間の台所の住宅改善運動が起り、立動式の台所が推奨される。大正から昭和にかけてサラリーマン層の住んだ文化住宅には、ガス・水道の普及により立動式の台所や風呂（外釜方式の開発）が水廻りとしてまとめられる。茶の間では丸いちゃぶ台を囲んで食事を取るようになる。お膳を並べる封建的な食事スタイルから、現代のライフスタイルの先駆けといえる民主的な一家団欒の風景が始まる。

④非営利の支援ネットワークづくり

古い家を再利用する市民グループのネットワークが広がりつつある。長く住み続ける工夫や保存に向けての市民による非営利の支援ネットワークづくりについて考察する。

町の表情を豊かにする近代の建物－洋館付き住宅（文化住宅）－を再評価し、長く住み続ける知恵を学び、昭和の暮らしを再発見し、非営利の市民支援ネットワークづくりを進める。

かながわ県民活動サポートセンターの市民活動フェアに参加し、3月13日（土）1時30分から5時20分まで、「洋館付きモダン住宅－現況報告と残す方法を考える会」を開催した。52名参加し、調査にご協力くださった居住者の方（12名）の参加もいただいた。この会の参加者の中でアンケートに今後の活動に参加希望の方が集合して「よこはま洋館付きモダン住宅を考える会」が発足した。

主な活動予定の内容は次の通りである。

①ミニ博物館に設営（一般空家の洋風住宅の所有者のご了解をいただき5月から10月まで借り上げてパネル展示などを行うことが決定した。）

②講座の開催

③通信の発行（居住者、会員、その他）

④見学会の開催

⑤調査（例：磯子西中、港北中原、藤沢等）

⑥支援（隨時、フランス瓦などの部材を譲り受け必要な方に提供するシステムづくり）

⑦市民グループとの交流

98年の3月から打ち合わせを開始し、実態調査のために町を何回も歩いた。訪問調査に快くご協力頂いた方が、予想をはるかに越えた。長年住み続けてきた家への愛着や大切にする気持ちを、肌で強く感じることができた。なんとなく懐かしくて洒落ている建物への愛着が、私たちのチームにも沸いてきたと思う。

しかし途中では意見がまとまらない、調査を進める協力体制がぎくしゃくするなどの課題が発生した。どうにかこうにか3月13日の発表会にこぎ着けたというのが正直なところである。異なった分野の寄り合い世帯の運営の難しさが露呈された。

しかし、3月13日の発表会に参加した方々から、継続的な非営利の活動に参加希望の方が多くいた。新しいチームを作り文化住宅をテーマにした市民の活動がスタートしようとしている。

居住者の方とお話をすると機会から感じられたのは、住まいに対する思い—大切に住まい続けている気持ちである。こんなに愛着を持って住まうことのできる家の素晴らしさを改めて教えていただいたと思う。愛されている文化住宅は、いつまでも大切にしていきたいものである。

